

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「むなしさ」というのは、自分の欲したものが得られない、あるいは、手に入れたと思ったものが失われてしまったという喪失感と関係しています。

「むなしさ」を理解するために、便宜^a的に二つの種類に分けて考えてみます。

一つは、何か大切なものや欲しいものを探しているのに中身が見つからない、あるいは、相手に何かを期待していたのに裏切られた、もしくは、愛していた相手が亡くなってしまったといった、自分という存在の外側に空虚なものができてしまう場合です。外に何かを求めていたのに、何か意味のあるものが得られなかった。そんなときに感じる外的な「むなしさ」です。コンサートやゲームで、楽しいことが終わってしまった「祭りの後」にも、これを感じやすい方がおられるでしょう。

もう一つは、自分自身に価値や中身がないのではないかと感じたり、自分が生きている意味がないと感じてしまったりする場合などに訪れる内的な「むなしさ」です。このような場合には、自分の内側に空虚なものが生じています。自分の心の中にぽっかりと穴があいてしまい、どうしてよいのかわからないというときの「むなしさ」です。

ただし、この二つは完全に分けられるものでもなく、多くの場合、連動して起こります。

A、大事な相手が亡くなってしまったという場合、もし相手と相思相愛の関係にあつて一体感が強かったり、あるいは、相手に対する依存が強かったりすれば、相手の死は自分自身の喪失にもつながってしまいます。自分の生きている意味もわからなくなり、希望も見出せず、心の中にぽっかりと穴があいてしまい、どうしてよいのかわからなくなってしまいます。

この分類の仕方は、フロイトの精神分析の知見^bを応用しています。フロイトも喪失という経験を、同じように二つに分類して考えました。前者の喪失、すなわち自分の外側にある物や人を失った場合、あるいは、探しているものが見つからない場合などを、フロイトは「対象喪失」として論じました。

この喪失した対象が、いま述べたように、たとえば自分と愛し合っていた人など、自分と一心同体的な存在だとすると、自

分自身が深く傷つき、自己を喪失することになってしまう場合があります。フロイトは、単なる「対象喪失」よりも、それが後者の「自己の喪失」へと連動するほうがより深刻であるとしています。

つまり、依存心や依頼心が強く働いている関係における対象喪失が、この身に深刻な事態を招くことになります。したがって、自分というものがなく、周囲に影響されたり、左右されやすく、外側の世界に強く依存していると、それが失われたとき、深刻な「むなしさ」や空虚に陥ることになってしまいます。つまり、外も内も空っぽになるわけです。

鴨居玲^{かみいれい}という画家がいます。自己の内面に眼を向け、自身の心の叫びや苦悩を表現する作品を多く描きました。おそらく自死によって五七年のシヨウガイを閉じたとされています。

私は、彼ほど「むなしさ」を自画像として描き出した作家はいないと考えています。彼の作品を観ると、相手に対する「むなしさ」と、自分に対する「むなしさ」が連動していることが、視覚的にとても理解できるように感じます。

一九八五年の作品「肖像」(図1)では、周囲に見えている表面的な自分の顔を外すと中身がない、つまり表に対応する裏がない、という形で「むなしさ」を表現しています。

そして、もう一つの一九八〇年の作品「しゃべる」(図2)では、^③「言葉のむなしさ」を描いたとされています。作者自身と思わ

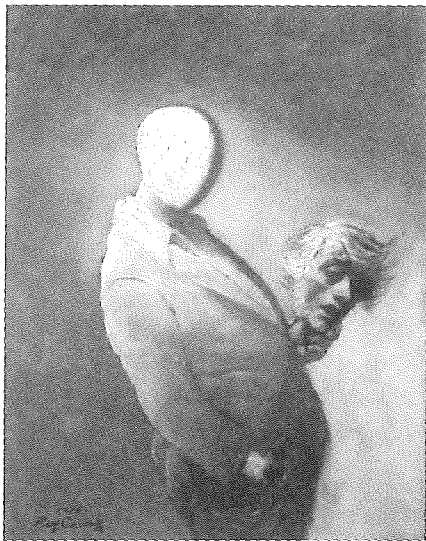


図1 鴨居玲「肖像」
『「むなしさ」の味わい方』より



図2 鴨居玲「しゃべる」
『「むなしさ」の味わい方』より

れる男の口から蛾が飛び出してくていきます。しゃべれば、しゃべるほど、言葉はミニク^dい蛾となつて飛び散ってしまう。彼自身もこの作品について、言葉の「むなしさ」を表現したと語っています。

言葉を話すということは、人

が生きて他者と関係を築き、社会の中に自分を位置付けてその居場所を獲得していくうえで、とても大切なことです。すなわち、言葉は自分の肉体や人生そのものと連動しているといっても過言ではありません。

ところが、鴨居玲は、その舞い散る言葉が自分の肉体から切り離されてしまい、自分自身の思いが相手にはまったく伝わらないものとして描いています。おそらく自分も空っぽで、人間関係を築くはずの言葉にも意味がなく、それに伴い自身と外部との関係性が絶たれ、そしていつそう、自分自身が中身のない空っぽののだと感じられる。表現そのものさえも、むなし。彼の作品およびその生き様は、彼自身のそんな深刻な思いを私たちに語りかけてくるように思えます。

鴨居玲の二つの作品を観たとき、外に對する言葉の「むなしさ」が、自分自身の中身が失われたと感じられる「むなしさ」と連動していることが視覚的にもうかがえるでしょう。

相手と関係性を築いていくはずの言葉がむなし。いくら話しても、相手に伝わらない。私も表現者の一人として、そのことを若いころに経験していました。

民俗学者の柳田国男の説によれば、「おもしろい(面白い)」という言葉の語源には、聴衆の「面が白くなる」という意味があるといえます。「面」というのは顔のことです。その昔、語り部が囲炉裏を囲んで話をしていたところ、おもしろい話に聞き手が顔を上げて、その顔が囲炉裏の光に照り返されて白く輝いて見えたということです。

私自身も音楽活動やその他で、人前で表現活動をする機会がたくさんありました。私の興味深いパフォーマンスに対して観客が喜んでくれたとき、確かに観客の顔がパツと明るくなったと感じられる瞬間があります。そのことに手応えが感じられ、私のパフォーマンスそのものにも良い影響を与えてくれます。まさに相手が輝いて「面が白くなる」のを実感するところです。

しかし、これとは逆に、相手に自分の意図が伝わらず、相手の反応が得られないというのは、やはり言葉をしゃべることに甲斐がなく、とてつもなくむなし経験です。話しても、伝えようとしても、相手の反応がなく、それによって相手との関係が冷え込んでしまうことで、自分には価値がないのだろうか、自分自身さえもむなしになってしまいます。

そもそも自分の意思が必ず相手に伝わるということはなく、手応えのないことがたくさんあります。

B、相手が自

分の言葉を聞いていないこともあります。しかし、そうしたズレは、他者と付き合うなかで避けることはできません。したがって、誰もが相手との関係性に敏感であれば、必ず「むなしさ」を感じますし、多かれ少なかれ、自分自身についても「むなしさ」を覚える経験からは逃れられないのです。

C、いまSNSの時代となり、そうした「むなしさ」をできるだけ回避しようとする行動が、あちこちで起きているように感じられます。

たとえば、ツイッター、あるいはいまの「X」で何かを発信する。そうすると「いいね」という形で、視覚的に反応が見られる。「いいね」の反応が多いととても嬉しいし、逆に反応が少ないと、ひどく落ち込んだり、アセ^gったりする。そして、どうすれば「いいね」が増えるか、いろんな発信を試すようになる。相手が驚いたり、喜んだりするような発信をすれば、「いいね」が増える。ものすごく多くの反響を得られた場合、「バズる」などといいますが、多くの人がSNS上で「バズる」ためのゲームを繰り返している感さがあります。

発信する側にとって、この反応が一種の生き甲斐のようなものにさえなってしまうのです。そして、相手の期待に応え、反応が増えるほど、自分も充実したような気になります。逆に、私たちは、相手からの答えや応えの、ズレにはますます神経質になっている。

私たちはメールの返事が来ないだけでも、相手から嫌われてしまっているのではないかと不安になります。SNS時代になり、私たちは、他者の反応、つまり応えを敏感に意識する、あるいは、意識しすぎる社会を生活しているのです。

ここという「相手の反応」というのは、生き生きした「面が白くなる」という現象とは質が違ってきます。SNSでの反応というのは、目の前に他者がいて、生身の他者の反応を直に感じるのではなく、「いいね」の数という、視覚的な記号や数字として認識しているのです。メールの返事なども、顔文字などが多用されていたりしますが、基本的には記号であり、相手の表情はうかがえません。

実際のところ、「相手の反応」に敏感すぎる時代でありながら、若い人たちなどのリアルな場でのコミュニケーションを見て

いると、一部のマスコミ関係者と同じだなと思うのです。

D、自分からはたくさん言葉を発しながらも、相手の話はまったく聞いていないという場面がよくあります。また、一緒の場にいながらも、相互のコミュニケーションに取り組むことをほとんどせず、それぞれがスマホに向き合っている場面も多いです。

すなわち、「相手の反応」に敏感すぎる時代を生きていながら、発信する言葉や情報が相手に届いて理解されているという点に重きが置かれているわけではありません。むしろ、かつてとは比べものにならないほどポウダイな言葉のやりとりがなされていながら、鴨居玲の作品に描かれているように、蛾のように飛び散っていく、むなしい言葉ばかりが氾濫しているように感じられます。

自分の内面と裏付けられた言葉を相手に伝えるというのではなく、相手の反応を引き出すための絵文字のような刺激的な言葉ばかりが拡散されている。意味を伴っているはずの「表意文字」としての言葉が、いつの間にか、意味をもたない、ただの記号としての「表音文字」になってしまっている。そして多くの言葉が読まれないまま、無意味化して氾濫しているのです。

フェイクニュースなどが氾濫するのも、共通した現象です。意味として事実を伴わない、裏付けのない情報が氾濫しているのです。

鴨居玲の作品に学べば、この目の前の状況こそ、本来的にはむなしいと気づくはずですが、でも、相手の反応を際限なく引き出すことで、表面的に「むなしさ」^④が感じられないようにふるまっている。しかし、それもわざとらしく感じられると、ますます意味がなくなる。それが、「むなしさ」^④をめぐる現代社会の状況ではないでしょうか。

(きたやまおさむ『むなしさ』の味わい方』による)

問一 傍線部 a～h のカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二 空欄 A～D に入れるのに最適な語を、次のア～キから選び、記号で答えよ。ただし、それぞれの記号は一度のみ用いることができる。

ア あるいは イ ところが ウ したがって エ むしろ オ つまり カ では キ たとえば

問三 傍線部①について、「二つの種類」の「むなしさ」とはどのようなものか。本文に即して、それぞれ三〇字以内でまとめよ（句読点・かっこ類も字数に含める）。

問四 傍線部②について、二つの「むなしさ」は、どのように「連動」するのか。本文に即して九〇字以内でまとめよ（句読点・かっこ類も字数に含める）。

問五 傍線部③「言葉のむなしさ」とあるが、筆者が、二つの「むなしさ」の連動において、「言葉」に注目しているのはなぜか。本文に即して七〇字以内でまとめよ（句読点・かっこ類も字数に含める）。

問六 傍線部④「「むなしさ」をめぐる現代社会の状況」とあるが、それはどのような状況か。本文に即して一〇〇字以内でまとめよ（句読点・かっこ類も字数に含める）。

問七 次のア～オの記述のうち、本文の内容に合致するものをすべて選び、記号で答えよ。

- ア 楽しいことが終わってしまったときに感じられる「祭りの後」の「むなしさ」は、「対象喪失」の一例といえる。
- イ フロイトは、「自己の喪失」に比べ、自己の外部の物や人を失う「対象喪失」は深刻ではないと指摘している。
- ウ 相手に対する一体感が強まる相思相愛の関係は、自己の外部にある存在が大切に大きい状態といえる。
- エ 「おもしろい」という言葉は、もともと目の前の相手が笑顔になる状況を指し、自分と相手の関係性を含んでいる。
- オ SNSにおいても「表意文字」の比重を増やしていくことで、無意味な「表音文字」の氾濫を避けることができる。

次の文章は、『増鏡』の一節である。鎌倉幕府討伐に失敗した後醍醐天皇は隠岐島（現在の島根県）へと流される。また天皇の側近たちも次々と処罰されることになった。これを読んで、後の間に答えよ。

源中納言具行も、同じころ東へ率て行く。あまたの中に、とりわきて重かるべく聞こゆるは、さま異なる罪に当たるべきにやあらむ。

(ア) 中納言は、ものにもがなやと、悔しきことのみぞ、そこには千々にくだくめれど、女々しう人に見えじと思ひ返しつ、つれなしづくりて、思ひ入れぬさまなり。去年の冬ごろ、あまた聞こえし歌の中に、

(A) ながらへて身はいたづらにはつ霜の置くかた知らぬ世にもふるかな

今ははいかになりぬるうき身ぞと同じ世にだにとふ人もなし

佐々木の佐渡の判官入道伴ひてぞ下りける。逢坂の関にて、

帰るべき時しなればこれやこの行くを限りの逢坂の関

柏原といふ所にしばしやすらひて、あづかりの入道、まづ東へ人を遣はしたる返事待つなるべし。そのほど、物語など情け情けしううち言ひかはして、「何ごともさるべき前の世の報いにはべるべし。御身一つにしもあらぬ乱れは、ましてかひなきわぎにこそ。かくたけ家に生まれて、弓矢執るわぎにかかづらひはべるのみ、うきものにはべりける」など、まほならねど、ほのめかすに、心得はてられぬ。

隠岐の御送りも仕うまつりしものなれば、御道すがらのことなど語り出でて、「かたじけなう、いみじうもはべりしかな。まして、朝夕近う仕うまつりなれたまひけむ御心ども、さながらなむ推し量り聞こえさせはべりき。何事も昔に及び、めでたうおはしましし御ことにて、世下り時衰へぬる末には、あまりたる御ありさまにや、かくもおはしますらむとさへ、せめては思ひたまへ寄らるる」など、おほかたの世につけても、げにとおぼゆる節々加へて、のどやかにて、酒など、所につけてことぞぎ、粗々しけれど、さるかたにしなして、よきほどにて下しつ。

東よりの使、帰り来たる気色しるけれど、ことさらに言ひ出ることなし。いかならむと胸うちつぶれておぼゆるも、かつはいと心弱しかし、いづくの島守となれらむもあぢきなく、誰も千歳の松ならぬ世に、なかなか心づくしこそまさらめ、つひに逃るまじき道は、とてもかくても同じこと、^(イ)その際の心乱れなくだにあらば、涼しきかたにも赴きなむ、と思ふ心は心として、都の方も恋しうあはれに、さすがることぞ多かりける。

よろづにつけて、事の気色を見るに、行く末遠くはあるまじかんめり、と悟りぬ。あづかりがほのめかししも、情けありて思ひ知らすれば、同じうはと思ひて、またの日、「^{かど}頭おろさむとなむ思ふ」と言へば、「いとあはれなることにこそ。^(ウ)東の聞こえやいかがと思ひたまふれど、何でふことかは」とて許しつ。かく言ふは六月の十九日なり。かのことは今日なんめり、と気色見知りぬ。思ひまうけながらも、なほためしなかりける報いのほど、いかが浅くはおぼえむ。

(B)消えかかる露の命の果ては見つさてもあづまの末ぞゆかしき

なほも思ふ心のあるなんめり、とにくき口つきなりかし。その日の暮れつ方、つひにそこにて失はれにけり。今はの際も、さこそ心の中はありけめど、いたく人わろうもなく、あるべきことと思へるさまになむ見えける。

(一部省略した部分がある)

【注】 ○ものにもがなや——「とりかへすものにもがなや世の中をありしなごらのわが身と思はむ」(『源氏物語』の古注釈に

引かれる古歌)による。 ○逢坂の関——現在の滋賀県大津市にあった関所。

○帰るべき逢坂の関——「これやこの行くも帰るも別れつつ知るも知らぬも逢坂の関」(後撰集・雑一・蟬丸)を踏まえる。 ○柏原——現在の滋賀県米原市東部の地名。入道の領地。

○あづかり——具行の身柄を引き受けること。

問一 波線部「当たるべきにやあらむ」を品詞分解し、文法的に説明せよ。

問二 傍線部(ア)～(ウ)を、適宜言葉を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問三 和歌(A)「ながらへてゝ世にもふるかな」を、適宜言葉を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問四 二重傍線部は和歌(B)についての批評である。この歌のどのような点が「にくき口つき」なのか、説明せよ。

問五 次の文章は、歴史物語について説明したものである。空欄(a)～(c)に入る作品名を漢字で記せ。

平安時代になると、歴史上の事件や人物を描いた、歴史物語が登場する。藤原道長を中心に藤原氏の権勢を語る (a) や (b) が書かれた。二人の老人の昔語りという体裁で、紀伝体によって歴史を語る (b) は、鏡物と呼ばれる一連の歴史物語の元祖であり、これを継承する作品に、『今鏡』、(c)、そして『増鏡』がある。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。ただし設問との関係で送り仮名を省いた部分がある。

磁州故^{もとヨリ}産^ス磁器^ヲ。有^{あり}孫某^{ナルもの}者^一、仿^{なら}古^{ヒテ}哥^{いにしへノ}・定^か・汝^{てい}諸^{じよ}窯^{えう}之^ニ式^ニ造^ル之^ヲ。既^ニ成^{ナルニ}、折^{ビテ}其^ノ佳^{ナル}者^ヲ、埋^ム地^ニ中^ニ。踰^{こユルコト}兩^{ニシテ}年^リ、取^{ダシ}出^{ウル}、市^ニ於^ニ京師^ニ・保^ノ定^ノ諸^ノ貴^ノ人家^ノ。見^ル者^ニ莫^レ不^レ以^テ為^ル真^ニ也^一。由^{リテ}此^ニ獲^ル利^{コト}十^{ナリ}倍^ヲ。州^ニ中^ニ鬻^{ヒサゲ}煙草^ヲ者^ヲ、楊^三氏^モ最^モ著^{アラハス}名^ヲ。価^{くらベテ}視^ニ他^{シニ}肆^{タカキコト}昂^シ甚^{スル}。貿易^{スル}者^ニ常^ニ盈^{ミツ}肆^ニ外^ニ。肆^ニ中^ニ物^ノ不^レ能^ハ給^{スルコト}、則^チ取^{リテ}他^ニ肆^ノ之^ヲ物^ヲ、印^{スルニ}以^{テシテ}楊^ノ氏^ノ之^ヲ号^ヲ而^{アタフ}界^ニ之^ニ。人^{ミナ}咸^ニ以^テ為^ル美^ニ、雖^ア出^{ダスト}重^ヲ価^ル不^レ惜^{シマ}也^一。由^{リテ}是^ニ言^{ハバ}之^ヲ、人^ノ之^ノ所^ニ貴^ブ者^ハ名^ニ而^ニ已^ニ。非^{ザル}有^ル能^ニ知^ル其^ノ實^ヲ者^上也^一。乃^チ世^ノ之^ノ学^ノ者^{カバ}、聞^{タリト}其^ノ為^レ經^ニ、輒^レ不^レ敢^セ復^タ議^セ、名^{ヅケテ}之^ニ為^シ聖^ノ人^ノ之^ノ言^ト、遂^ニ不^レ敢^ラ有^ラ所^ニ可^{スル}否^一。即^{モシ}有^{ルモ}一^ノ二^フ疑^ヲ之^者、亦^タ不^レ過^ギ三^{ゲテ}曲^{スニ}為^ガ之^ヲ說^ヲ而^ニ已^ニ。是^レ貴^ノ人^ノ之^ノ買^{ヒテ}磁^ノ器^ヲ而^ニ市^ニ賈^{ヒサゲ}之^ヲ販^ニ煙草^ヲ也^一。故^ニ余^ニ謂^{おもヘラク}、読^{ムニモ}經^ヲ、不^{シテ}必^{ズシモ}以^テ經^ノ之^ノ故^ヲ浮^ふ尊^{そん}之^上而^ダ但^マ求^ム聖^ノ人^ノ之^ノ意^ヲ。果^{タシテ}知^{レバ}聖^ノ人^ノ之^ノ文^ノ之^ノ高^ク且^ツ美^{ナルヲ}、

則偽者自不能乱真。嗟夫、嗟夫、此固未易為人道也。

語釈

○磁州——地名。

○哥・定・汝諸窯——名品を生産した磁器の製造元。

○京師——首都。

○保定——地名。

○肆——店。

○貿易——物品を売買する。

○經——儒教の經典。

○浮尊——軽々しく尊ぶ。

(崔述『考信錄提要』による)

問一 波線部 a「雖」、b「輒」、c「敢」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二 傍線部 1「孫某」は何をしたのか、説明せよ。

問三 傍線部 2「莫不以為真也」を、書き下し文にせよ。

問四 傍線部 3「楊氏」は何をしたのか、説明せよ。

問五 傍線部 4「人之所貴者名而已。非有能知其実者也」を、現代語訳せよ。

問六 傍線部 5「果知聖人之文之高且美、則偽者自不能乱真」を、現代語訳せよ。

問七 この文章の主張を、一五〇字以内で記せ(句読点も字数に含める)。